

栽培漁業技術開発事業調査 (タイワンガザミ) (要約)

佐多忠夫

I. 目的及び内容

タイワンガザミ資源の積極的な増加を図るために、人工種苗の放流調査と天然における資源生態調査を与那海域で昭和59年度から継続的に実施し、栽培漁業の技術開発と事業化を図ることを目的とする。

本調査結果は「平成4年度栽培漁業技術開発事業調査報告書(沖水試資料No. 116)」にて報告したので、ここでは要約を記した。

II. 要約

1. 今年度は与那城村地先の海中道路北側の干潟水域にて、第1回次130千尾(平均甲幅7.7mm)、第2回次104千尾(7.3)、計234千尾の稚ガニの直接放流を行った。
2. 放流稚ガニは放流後の数日間で放流区域内の密度が急激に減少し、逸散がかなり早かった。
3. 1992年の天然稚ガニの定着は5月、10月頃にモードがみられ、前者より後者の定着が多く、1991年と逆の現象がみられた。
4. 干潟でみられるタイワンガザミは2cm以下の個体が大部分である。
5. 与那城村、石川市、勝連、沖縄市、中城漁協の漁獲量調査を行った結果、1992年の漁獲量はそれぞれ11.7ト、5.8、2.4、10.2、7.5であり、最も与那城村漁協が多かった。
6. 1992年の漁獲量は、前年に比べ与那城村漁協が1.8トン減少し、逆に沖縄市が2.5トン増加した。
7. タイワンガザミの平均単価は石川市漁協が1,017円と最も高く、ついで中城736円、沖縄市636円、与那城村617円、勝連534円であった。
8. 与那城村漁協に水揚げされるタイワンガザミは、雌雄とも夏場に小型個体が、冬場に大型個体が多く漁獲される。
9. 与那城村漁協のタイワンガザミの漁獲量と天然稚ガニ定着数及び稚ガニ総数(天然稚ガニ定着数+放流数)とは、年による増減が一致している。
10. 1992年の漁獲量の減少は、漁獲努力量の増加及び単位努力当たりの漁獲量(CPUE)の減少から天然のタイワンガザミ資源の減少によるものと思われる。